

修了生の声・在院生の声

修了生 伊藤 大介さん（社会福祉学専攻）日本福祉大学 講師



福祉現場で働く中で抱いた「効果のある実践ができていないか?」という疑念が、大学院で学ぶきっかけでした。修士課程では、効果評価の奥深さを知り、その過程で統計解析の世界にふれました。修士取得から数年後、効果評価に役立つ統計解析を行えるようになりたいと思い、博士課程に進みました。博士課程では、多くの先生方からご指導頂き、拙いながら統計解析を用いた論文で学位を取得できました。統計解析は数ある手段の一つに過ぎませんが、実践の効果を適切に評価するための知識と技術は、福祉専門職に欠かせないものです。

博士課程はそれらを学ぶ最適な場だと思います。私が、研究者を目指す方だけでなく、実践者として究めていきたい方にも博士課程をお勧めする最大の理由です。

在院生 小出 直さん（社会福祉学専攻）新潟医療福祉大学 助教



地域でソーシャルワーカーとして働く中で、生活保護制度の地域差が生活実態と乖離している現実には強い違和感を覚えたことが、博士課程進学のかきかけでした。

現在は、生活扶助基準における地域差の根拠と限界について、歴史的・政策的視点から検証しています。日々問いを深められるのは、厳しさと温かさを併せ持つ指導教官の的確な助言と、同じように社会の矛盾に向き合う仲間たちの存在があるからです。

大学院では、実務の経験を問いへと昇華し、理論と向き合う時間を得ることができます。迷いながらも一歩を踏み出したその先に、見える景色は必ず変わります。

在院生 池田 麻衣さん（国際社会開発専攻）



現在、ガーナで仕事をする傍ら、障害児と家族を支援するボランティア活動を行っています。日本では理学療法士として子どもの成長・発達のお手伝いをしてきました。日本の福祉制度とニーズの乖離に疑問を抱き、青年海外協力隊に参加しました。そこでの経験や考えていたことを、改めて学術的に考え直したいという思いで入学を決意しました。

修士課程では、「障害」に向き合うためには理学療法という専門性を超えて、幅広い視野と知識を深めることが重要であることを痛感しました。現在は、ボランティア時代に関わったNPOのもとで学んだことを基盤に実践的な活動をしています。具体的な支援の提案や実践を通して、関係者と共にガーナにおける「障害」を考えています。

論文指導体制について

本研究科は、複数指導体制（主指導教員1名・副指導教員1名）を制度化しています。

副指導教員は、院生の研究テーマや領域を踏まえ1年次前期に決定されます。指導の目安は、主指導教員は月1回以上、副指導教員は2ヶ月に1回以上の指導を一応の目安としています。

3 年 次

9 月	12 月	1 月	3 月
博士学位授与 〔第1次審査〕 〈秋期〉申請期限 ※2	博士学位請求予定論文 〔公開発表会〕	博士学位授与審査 〈秋期〉申請期限 ※3	学位授与

連した業績（国内外の査読制度を有する学術専門誌等に掲載された2編以上の論文）があること等が申請要件となります。
ます。3年次の後期以降から申請が可能となります。

※3 ●第1次審査に合格していること等が、申請要件の1つとなります。